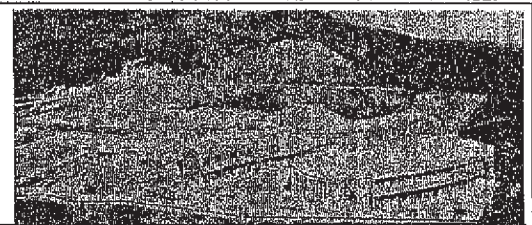




佑 啓



ふる星学会・和田浦 〒299-2725 安房郡和田町黒岩 1190-1
tel 0470-40-7227 mail fgakusya-wada@blue.ocn.ne.jp

社会福祉法人 佑啓会
http://www3.ocn.ne.jp/~fgakusya/
発行者 星見 吉英 編集者 三股 金利

ふる星学会 〒290-0265 市原市今宮 1110-1
tel 0436-36-7611 mail fgakusya@peach.ocn.ne.jp

濡恋も絶景だった

星見 吉英

雲ひとつない、真つ青な空、
目が開けられない程、新雪に射
し込む、まぶし過ぎる日差し。
ここは長野と群馬の県境にある
嬋恋村。忙しい合間を縫って職
員とスキーにやって来た。

「えんちよ、去年は和田浦オ
ブンで忙しいからスキーツア
ーやめましたけど今年も新制度に
向けて忙しいからやめますか」
「そうだねー、でもこれから毎
年こんな状態になりそうだから
遊ぶ時は遊ぼうか」

「そうですね、こんな状態を続
けたら、仕事だけで一生終わっ
ちゃうような気になってきます
よ」
「全くだね。毎日、支援費だ、
契約だ、補助金カットだなんて
話ばかりだからね。たまにはみ
んな忘れて行くことにしよ
うか」

参加を募ったら三十名を超え、
最後はジャンケンで、施設を守
る人、遊ぶ人と決まりいざ出発。
バスの中

「ところで、えんちよ、今検討
している契約書の件ですけど、
やはりなんか変ですよ」
「ちよっとその話からのがれる

ために来たんじゃないの」

「滑り出したら忘れるだろうけ
ど、やはり頭から離れませんか」
「やはりそうかい、それくらい
何か引かかるものがあるね」

「だって、契約書や重要事項説
明書がだんだん出来上がるに連
れて、これって福祉なのって感
じになりますよね。中身を見た
ら親御さん達驚くんじやないで
すかね」

「うん、そう思うね。逆の立場
だったら、私も驚くね。施設の
役割っていったいどこにあるの
って感じになるね。」

契約なんてものは、文書にす
るとこういう内容になってしま
うのは仕方ないんだろうけど、
サービスを提供する側はどうし
てもリスクを先に考えてしま
うからね」

「でも、あの内容で施設で生活
できる利用者っているんですか
ね」

「額面通りとれば難しいね。契
約なんて所詮、形なんだよね。
ようするに、双方の信頼関係で
成り立つんじゃないかと思うね。
何か問題が生じた場合に、突然
表に出てくるようなところがあ
るんじゃないかな。たとえば、
ホテルを利用する場合に、わざ

わざと約款を読んでも泊まる人
なんていないよね。でも、あれ
もよく読んでみると、利用する
側にはかなり厳しい内容になっ
ているんだよ。利用する度にあ
れを説明されたら『だが、こ
んなところに泊まってるか』
って感じになるんだよね。」

「そう言えば、ついこの前、ホ
ールインワンを初めてやったつ
て話したよね。二十五年目にし
て初めて。その時に備えて、ホ
ールインワン保険というのに加
入していたんだけど、その約款
をよく読むと今回のケースは保
険は降りないような仕組みにな
っているんだよ。勉強のために
いろいろの人に相談してみたん
だけど、結論は、そんな保険に
何年も入っていたという消費者
(つまり私)がバカだったって
ことに落ちつくんだってね。ち
よっと腹が立ったんだけど、日
頃の信頼関係の問題なんだろう
ね」

「書面にしてしまうと、ガチガ
チだし、かと言ってなあなあだ
とこわい気がするし本当に難し
いですね。ところで、本人と契
約を結ぶっていう大問題はどう
解決したんですか」

「それがね、利用者の中でも理
解するかなと思えるような人に
何人か説明してみたけど、内容
となるとほとんどだめだったか
らね」

「そうですね」

「やはり保証人のような形をと
る以外ないのじやないかと思
うね。だって今まで悪徳商法なん
かにひっかかった知的障害者の
相談に対して、この人達は契約
能力がないんだから無効だと主
張して守ってきたってこと随分
あったからね。今度はその人と
我々が契約を結ばなければなら
ないというのは、かなりの矛盾
を感じるね」

「ところで、利用者の負担金が
これまでより増えるようですが、
その辺りは大丈夫ですか」

「支援費になると、国が定める
利用者の負担金は倍近くになる
し、支援費に含まれない特別な
サービスに対して自己負担が発
生するようになるね。でも基礎
年金の範囲で納まるだろうと思
うよ。今までのように施設にい
ると預金がどんどん増えて、君
達よりも預金高が多いなんてこ
とはなくなると思うね」

「負担増になったお金はどこに
回るんですか」
「国は在宅福祉に回すと言って
いるけど、そうなることを祈る
ね」

2本目と思ったら、もう足がガ
クガク。太ももはパンパン。コ
ーヒーブレイクといきたいとこ
ろだが「オレは、カナダで滑っ
ていた」なんて普段職員に大ミ
エを張っている手前、2本、3
本。しかし強がりはそこまで。
職員に悟られないように早めに
温泉につかり、コンソと生ビ
ールをぎゅ。うーん、やっぱり
これだ。そのまま宴会に突入し
たが、歳と体は正直、すぐにメ
ロメロ、口もメロメロ。

「ねえ君達、いつも福祉は理念
とシステムだと言ってきたけど
さ、こんな状況になるとやはり
心だね。左手にソロバン、右手
に福祉なんてなんか淋しいよね。
先達が考えながら地味に地道に
努力してきたことに回帰すべき
だと思っね。そう思わない？ね
え君達、そうだろう。」

と気がついたらもう朝だった。
目覚めは爽快だったが、なぜか
若い職員の視線は冷たかった。
(理事長)

こんな話をしているうちに、
あつという間にスキー場に到着。
まだ職員には負けてもらえない
と、早速ゴンドラで頂上まで行
き、いっせに滑り降りる。さあ

スキー場にて



ふる里学舎・和田浦が、開設されてからもうすぐ1年になります。そこで関係する皆さんの思いを聞いてみました。

過疎化がすすみ、高齢化率は三十四%と千葉県で一番高いです。こんな環境の中で、町民の皆さんが元気で生活を営む基本は健康です。健康を「維持」したり「回復」させるための福祉行政は、しっかりとした住民との合意形成を前提にノーマライゼーションの社会サービスができるのです。昨年「社会福祉法人 佐啓会 ふる里学舎・和田浦」ができたことで、福祉で一番むずかしい障害者の社会復帰の促進や、雇用の場の確保に一歩前進できたと思います。…広く安房地域の皆さんに利用していただくことや、ボランティア活動、NPOとのニーズの結合など、ネットワークづくりが行政の役割りと思えます。豊かさから幸せへと目標をかきかえられるようにお互い頑張りあいいたいのです。

健康福祉課

和田町に福祉施設が出来て、皆さんがいるいろいろな面で喜んでおります。

和田町社会福祉協議会といましては、ボランティア関係でご協力できることがあります。例えばイベント関係にボランティアが協力いたします。

また、毎年十一月に開催しております、福祉まつり(ボランティアフェスティバル)作品の展示・販売を施設の

等兼ねて出店くださるようお願いいたします。

町民が環境の良い、素晴らしい施設であると認識を新たにすることでしょう。

とくに地元集落の行事などに参加し、地域と交流を深められますよう期待しております。

和田町社会福祉協議会

知的障害者更生施設「ふる里学舎・和田浦」が開所から早十ヶ月、障害による社会的不利を乗り越えて、指導員の援助を仰ぎながら日々の生活、作業体験を通し、基本的な生活習慣、情緒の安定、社会的自立を目標にいろいろな取り組みの実践をしております。同じ地域に住んでいる一人として、学舎の姿勢、ガラス張りの運営など、とても好感がもてます。

地域に対してもボランティア活動をおして貢献。今までは月一回の美化運動にも参加。道路の清掃。地域住民の先頭にたつて落ち葉掃き、又雪かきなど、指導員と寮生さんが汗を流して働く姿に体の熱くなる思いです。

この地域・平塚にふる里学舎・和田浦ができ、同じ地域に住んでいる一人として、とてもうれしく思います。また、地域のみならず同じ気持ちだと思えます。——— ありがとうございます、ふる里学舎・和田浦

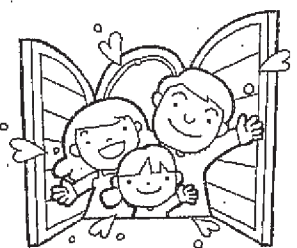
地元の方々

私は、いつも思っています。自分の家の前ぐらいいきれいにしましょう。そして、隣の家の前もきれいにしましょう。双方の間に残された汚れが気になりますから、どちらかの家の方がきれいに

するでしょう。

私達は、いつも頼ったり頼られたり、支えたり支えられたりするからお互いの存在と役割を認めあう、楽しい社会生活ができるんです。——— 入所している皆さんの明るさ、地域が明るくなったと喜んでくださる地元の皆様などに引きつけられ、千葉県や町の皆さんの関係者のご協力に感謝しながら、「ヒトを育てる」場であることを訴えていこうと思っています。

(和田町町長)



小さな誓い

熊沢 徹

「ああ俺は死ぬんだな」

そんなことを救急車の中で冷静に考えていた。忘れもしない。六月三十日。初めてのスポーツ行事への参加が富浦びわマラソンだった。ふる里学舎の看板を背負いながら(かなり脇役で)完走したものの、日射病と脱水症状で病院のお世話になってしまった。さあこれから和田浦で頑張るぞと意気込んだ矢先に、いきなり職場には迷惑と心配をかけ、自分としては自称スポーツマンとしてのささやかなプライドを失い、無責任な社会人だと痛感した最悪のスタートとなった。しかし人間は最悪を知ると強いも

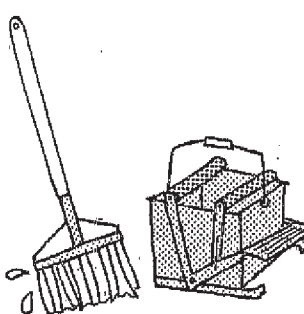
ので「もう下は無い。後は上がるだけだ」と心に言い聞かせ開き直り、無理矢理な前向き思考でここまでなんとか頑張ってきた。

そして新年を迎えるにあたり、自宅で佐啓の原稿を書きながら激動の一年を振り返ってみることにした(飲めない酒を飲みながら、顔は既に赤い)去年を振り返る上で「価値観の変化」ということを中心に考えてみたい。人は経験によってかわっていくものだと思うが、長い人生の中でそれが大きく変化することは意外と少ないと思う。私は二十七歳で転職し、縁あってふる里学舎にお世話になることになったが、昨年はいろいろと考えさせられる貴重な経験が出来た一年だったと思う。それは、自分が生まれ育った地元に戻って来たいと真剣に考えたこと。四月から新しい環境で初めての仕事をしたこと。年齢の違う同期とあーでもない、こーでもない仕事(余興も含む)をしたり遊んだこと。寮生という「他人」の幸せを考えるようになったこと。これら全ての経験が新しい価値観を作りだしてきている。

例えば、新しい環境での初めての仕事はまさに驚きの連続だった。何をしていたのかわからない、何を聞いていいのかもわからない。とりあえずトイレを奇麗にしよう。そんなこともあったが、新しい仕事や行事に参加する度に「自分に向いている」と実感していた気がする。これも自分にとって新鮮な感覚だった。しかし、「他人」の幸せを考えるということは自分の中で消化しきれない感じがしてならなかった。自分の幸せについて真剣に考えたことのない人が他人の幸せについて考えられるのか?とか、寮生にとつ

ての幸せとは何か。とか、自分達の幸せについての価値観を寮生に押し付けてないか。などと考えれば考えるほどわからなくなってくる(酒を飲んでの為思考回路は複雑な考えを避け、シンプルなことしか考えられない)そう。うだ! そんなに難しく考えるのはよし。今自分が出来ることをしよう。過しやすく楽しい環境を提供して欲しい。それが少なくとも寮生の幸せに繋がっていくはずだ(そう思いながら酒が致死量に達し永眠に入る)小さいながら生活係としての新年の誓いとする。

(和田浦・指導員)



編集後記

春になると『土の匂い』がすると高校時代の国語の文集に書いた。

『土の匂い』と『磯の匂い』がして春を感じ、太陽の光を浴びながら海まで自転車走らせた、十七歳。

あれから八年の月日が経ち、この数年は目のかゆみと鼻詰まりで春を予感している。

今年はすでに、症状が始めています。スプリング ハズカム

佐啓四八号をお届けします。

(岡田 有代)